不在証明

島田幼女殺害事件

不在証明

島田幼女殺害事件

佐藤一

時事通信社

著者紹介

佐藤　一（さとう・はじめ）

1921年　栃木県日光市に生まれる。
1936年　栃木県今市市の小学校を卒業後，上京し，国産精機，東京芝浦電気に勤務。
1949年　松川事件容疑者として逮捕。
1963年　無罪判決確定。以後戦後史研究にとりくむ。

著　書　『下山事件全研究』（時事通信社），『松山事件』（大和書房）。

不在証明——島田幼女殺害事件　　定価　1200円

昭和54年6月15日　発行
昭和54年8月1日　2刷

著　者　佐　藤　　一
発行者　立　花　丈　平
発行所　株式会社　時事通信社
東京都千代田区日比谷公園1—3　〒100
電話　東京03(591)1111(大代表)振替東京4-85000
印刷所　株式会社　太平印刷社
東京都品川区東品川1—6—16

©1979 HAJIME・SATŌ（落丁・乱丁はお取り替えいたします）

0036-——-3199

目次

1 誘拐殺人――2
事件発生と目撃者 2　遺体発見 8
「犯人」逮捕 18　検察官冒頭陳述 23
2 目撃証人（一）――27
中野証人 27　鈴木証人 35　松野証人 43
3 目撃証人（二）――44
太田原証人 44　松雄証人出廷 57
4 自白調書――64
赤堀自白調書 64
5 弁護人――76
事件依頼 76　出自 81　もう一人の弁護人 88

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

6 不在証明——91
十二日のアリバイ 91　家出 99
7 証人——111
検察官側証人(一) 111　検察官側証人(二) 126
8 上申書——132
東京のアリバイ 132　「上申書」提出 135
9 検証——149
第一回検証 149　第二回検証 159
10 結審——170
証人喚問 170　古畑教授招来 185

11 判決 188
判決文 188
12 再審請求 207
足跡検証 207
凶器の検証 220
十日のアリバイ発見 224
13 鑑定 228
太田鑑定(一) 228
太田鑑定(二) 238
あとがき 249

装幀 阪田啓

不在証明—島田幼女殺害事件

1　誘拐殺人

事件発生と目撃者

昭和二十九年三月十日、静岡県島田市快林寺境内のなかの中央幼稚園から、園児が一人行方不明となった。

当日は、この幼稚園恒例の遊戯会で、お菓子やおでんを売る屋台店などが出ていて、快林寺境内はかなりの賑いだったようである。出番を待つ園児たちも着飾って遊んでいたし、母親など家族の姿も多かった。遊戯会は華やいだ空気のなかで、順調に進行していたのである。

だが、午後になって、出番がきた佐野久子ちゃん（六歳）が現れない。近くの佐野家に連絡をとっても、家にはいないし、幼稚園の教室にも、快林寺境内のどこにも、彼女の姿が見当らないのである。結局、夕刻になって、島田署に捜索願がだされることになった。

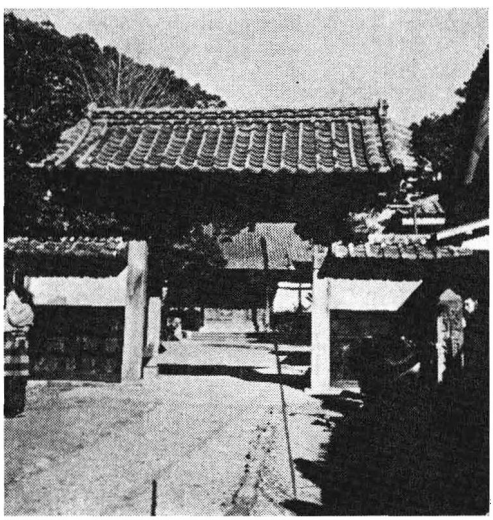
島田市の当時の人口約四万、昭和二十三年に市制が敷かれていたが、中心部は小さな、狭い町であった。騒ぎが知れわたるのも早かったが、また、久子ちゃんらしい女の子が、若い男と一緒に歩いていたのを見たという、いわゆる目撃者の現れたのも早い。足取は、誘拐事件とすれば、まずは

理想的な早さでつかめた、ともいえよう。

さて、その足取だが、快林寺の山門から真南に走る狭い道路を通って、旧東海道の本通りに出て右折、そこからは島田駅前を経て駅西側のガードをくぐり、横井グランド（運動場公園）に出たらしい。そして、グランド外側の、大井川の堤防上や、河原のなかを東に歩いて蓬莱橋に到り、この橋を渡って対岸の牧之原台地の方に向った、というのが判明した足取のおおよそのところであった。

また、足取とともに、久子ちゃんと一緒に歩いていた若い男の人相なども、目撃者の話に多少の喰違いはあったが、それなりにつかめてきたようであった。ここでは、二人の話を紹介しておこう。

まず、快林寺から本通りに出る、狭い裏道のような道路の中程で、道路に面して東側に住ん



快林寺山門

でいた中野なつ（六九歳）は、島田署員につぎのように述べている。

「此の男の人は私は一面識もなく、何処の人か存じません。私の見た処では年齢二十五、六歳から二十七、八歳位までの人で、丈は五尺二寸位で、痩形で、顔は面長く色の白い、頭の毛は長く、油をいくらかつけて分けておりました。メガネはかけておりませんでした。着ているものは鼠色の背弘服で、ズボンは黒色でありました。履いておったものは黒い革の様でありました。……私の見た処では、労働をする人の様には見えませんでした。勤め人か何かの様に見えました」（昭和二十九年三月十二日、山下馨巡査部長作成供述調書）

もう一人は、当時蓬莱橋の橋番をしていた鈴木鉄藏（七三歳）である。

「此の男の人は、私は初めて見た人で何処の人かは知りません。私の見た処では年齢三十歳位、丈五尺二寸位で痩形、顔の色は黒く稍長顔でしまっており、髪の毛は分けておったと思いますが余り長い方ではありませんでした。着ておったものは黒か鼠色か覚えもないが、黒っぽいジャンバーでありました。ズボンは覚えはありません。履物は確かなことは申上げられませんが、後で考えてゴムの半長靴ではなかったかと思われました。……此の男でありますが、口のきき方から態度からして、私は土方ではないかと思いました。私のおる橋番の前をだまって通って行く処を見ると、橋銭を払うことを知らない人ではないかと思われます。したがって、土地の人ではないと考えられます。橋銭は大人が五円、子供が三円であります」（昭和二十九年三月十二日、山下馨作成供述調書）

中野なつ、鈴木鉄藏二人のこの話に共通するところは、背丈五尺二寸（一メートル五八センチ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

位、痩形、髪の毛は分けていて、顔は面長であった、といったところである。逆に際立った違いは、その顔色であろう。中野が、色白、と述べているのに、鈴木は、黒いといっている。また、全体の印象としても、「勤め人か何かの様……」というのに対して、「土方」といった異なった感じとなっていた。

だが、警察が作成した誘拐者のモンタージュ写真を当時の新聞でみると、頭髪をきちんと分け、背広を着て、一見して勤め人風となっている。警察は中野なつの話の方をとったのだろう。

警察がそうしたのには、それなりの理由があったにちがいない。その理由の一つは、目撃状況にあったと思われる。中野なつの方は、家の前から、若い男が女の子を連れて快林寺を出てくるのを見ていた。その二人は、道幅約二メー

快林寺山門より狭い道路を抜けて出る本通り（旧東海道）

トルという狭い道路を、中野なつの前を通り過ぎて、本通りの方に抜けていった。
さらにその後、中野なつはもう一度この二人に会っている。彼女は二人の後姿を見送ったあとで、まもなく大井川の畑に向った。家の前の狭い道路を二人を追うようにして本通りに出ると、そこを左折して東に向い、少し歩いてこんどは右折して南に向い、島田駅東側のガードをくぐって東海パルプ前の三叉路に出た。そこで、中野はさきほどの二人連れに会った。二人は島田駅西側のガードで東海道をくぐり、そこからおなじく東海パルプ前に出る道を歩いてきたらしいのである。
そのうえ、中野なつは、大井川の畠について仕事にかかってからも、新堤防の上に二人の姿を見送っている。
だが、鈴木鉄藏の方は、二人連れが橋番の小屋の前を通り過ぎたときは、その姿を見ていない。誰かが通った気配に気づき、鋸の目立を止めて振り返り、二人連れを呼び止めて橋銭を催促したときは、彼らは五間（九メートル）くらい先で立っていた、というのである。しかも、若い男は立ち止りはしたが振りむきもせず、橋銭は帰りに払うといって立ち去っている。
こうみてくると、警察が、久子ちゃんを連れ去った若い男のモンタージュ写真を、中野なつの話をもとに作成したのは、よく理解できることであった。彼女は、若い男を、三度見ているのである。しかも一度は、すぐ目の前を通り過ぎたのを見ているのである。それにこの中野なつの話に見合う、もう一人の目撃者があった。長谷川睦（二一歳）である。彼も、若い男は「青白い人でありました」と、述べている。

その日長谷川は、豆腐の配達に出た帰り道、自転車に乗って本通りから快林寺に向う狭い道路に入った。そしてその直後、かねて顔見知りの久子ちゃんが、若い男と連れだって快林寺の方からやってきたのに出会ったのだ。自転車に乗っていたので、あまり観察する時間はなかったようだが、ともかく長谷川はその若い男について、背丈五尺二寸位、肥っても、痩せてもいない、普通の体格で、久子ちゃんと馴れなれしく話し合っていたようすから、親戚の人のように感じた、と語っている。

遊戯会用の晴着をつけた女の子と親しそうに話し合っていて、親戚の人のような感じを与えた色白の若い男、といえば「土方」というよりはやはり「勤め人」風といったイメージであろう。もちろん、警察がそうしたイメージを抱いたことについては、中野や長谷川の話の他に幼稚園内における目撃者の話も参考にされているようである。

事件の起きた島田市は、その昔徳川の時代に川越えで栄えた町である。

川幅八〇〇間（約一・四キロ）、常水二尺五寸（約七六センチ）、一尺（三〇センチ）増水で馬越え、さらに一尺増水までが歩行越え、増水がそれを越えると川留となった。旅人はすべて宿をとらなければならない。川越え人足四百余人は休業となったが、こんどは宿屋が賑うことになる。曲亭馬琴は、「連日の雨に大井川往来なければ、岡部より島田の間に諸侯みちみちていとにぎはへり、夜中駅中の繁昌小人の小うたなど、しばらく江戸に在るが如し」と、書き残している。

明治になって、この宿場町島田をうるおしていた川越え制度は廃止となった。架橋はもちろん、渡船までも禁じていた徳川幕府が倒れ、通行は自由となった。現在大井川南岸の高台にひろがる広大な牧之原茶園は、このとき職を失った川越え関係者によって開かれたものともいわれている。

茶畠の開拓とともに農作業往来のため、橋がかけられることになった。以来橋は代を重ねておおよそ一〇〇年、蓬莱橋となって今なお生きつづけ、現在は土地改良区の管理下にある。橋の北端に位置する番小屋には番人が常駐し、利用者から橋銭をとり、管理費に当てる。

三月十日、久子ちゃんの元気な姿を最後に見たのは、当時の橋番鈴木鉄藏であった。その鈴木の話によれば、久子ちゃんは若い男に背負われて蓬莱橋を南へ、牧之原台地の方に渡っていったという。二人が消えたのは、牧之原台地にまちがいないようだった。

遺体発見

翌三月十一日から、牧之原台地にひろがる広大な茶園を中心に、捜索が開始された。捜索隊は、三月十二日付「読売新聞」が伝えるところによると、島田署員二〇名、それに久子ちゃんが住んでいた幸町町内会員、青果同業組合員（久子ちゃんの家は八百屋さんであった）、初倉村村民など約一〇〇名、ということである。

ここに初倉村というのは、蓬莱橋を島田市側から南に渡って、その取っ付きのところに位置する村で、牧之原の大茶園も一部はこの村のうちにひろがっている。

十二日には、捜索隊はさらに大きくなっている。

「島田署は前日に引続き十二日も朝七時三十分全署員五十名を動員して五班に分け、これに町内青果業者、幼稚園保母さん、PTA、消防団など約三百名が応援し、誘かい犯人が入り込んだとみられる榛原郡初倉村地獄沢から同郡牧之原三千町歩にわたる茶畑をシラミつぶしにさがし同郡金谷、吉田両町方面にまで聞込みの手をのばしたがなんら手がかりがなかった」(昭和二十九年三月十三日付、「読売新聞」)

地獄沢というのは、正式な地名ではない。蓬莱橋の南袂から牧之原台地に登る、鬱蒼とした林に囲まれた急な山道のあたりを、土地の人々はこう呼ぶらしい。そしてまた、蓬莱橋さえ、地獄橋という人たちがいる。

その地獄沢を登る山道の中程から右手、西の方に入った松林のなかで、久子ちゃんは発見された。裸にされ、暴行をうけ、殺害された、むごたらしい姿になって、山の斜面に天を仰いで横たわっていたのである。

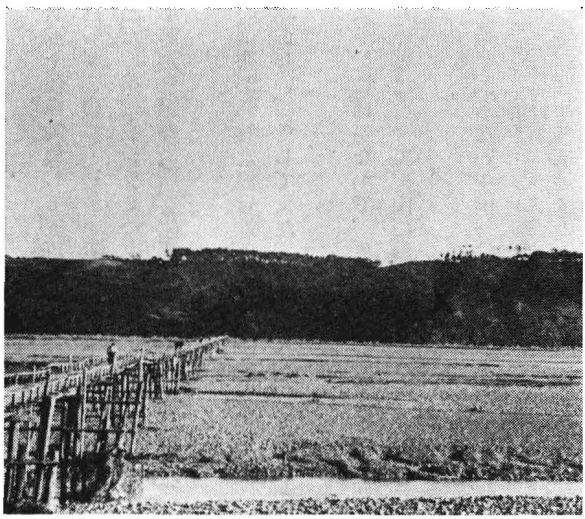
発見は、行方不明後三日たった十三日、朝の捜索開始後間もない午前一〇時頃であったといわれている。事件はここで誘拐から、暴行殺人事件となって、所轄の島田警察署に捜査本部が設けられ、県警本部指導の下に、大井川、志太、榛原、東小笠、西小笠五地区の警察署が応援、本格的な

捜査活動の開始となったわけであるが、とりあえずここに司法警察員小泉芳一の作成した検証調書を示しておこう。

第一　犯行現場榛原郡初倉村沼伏原四九二五番地（以下略）

第二　被害現場の模様は前記松林続きであって、地上一丈一尺位い植林後十五、六年位い経過した松の木林であった。付近には丈余の雑木並に大人丈を没する笹の密生しありて一帯は歩行は極めて困難である。

現場より北々西を望む島田市付近一帯及び大井川の流れは密生する松及び雑木の枝葉に遮られ透視稍々困難であり、島田市方面をまえにして左側は前記同様の松林であり、後方即ち現場より山頂には約二拾米位いにして沼伏原一帯の茶園には耕作者の雨滴を凌ぐ掘立小屋が無数に



事件現場遠景、×印死体発見場所

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo